大学全体の質の向上につなげる
JAED共同企画　授業のユニバーサルデザイン

日本高等教育開発協会（JAED、中井俊樹会長）と共同で企画してきた『授業のユニバーサルデザイン』は2回目を迎える。特定学生への特別な配慮にとどまらず、多様化するあらゆる学生に対応しうる「ユニバーサルデザイン」を通じて、2年間で16件の事例に学ばせていただいた。それらの共通点は、配慮すべき学生のための授業デザインではなく、あらゆる学生がよりよく学べるようにするための授業デザインであった。教員が普段から当たり前に行っている授業実践のなかにも、ユニバーサルデザインに通じる工夫もあるだろう。多様化する学生一人ひとりにとってベターな授業のあり方を模索し続けることこそが、ユニバーサル授業デザインへの近道なのではないだろうか」と振り返っている。まさに自覚はなくとも日常の教員一人ひとりの学生を思う創意工夫の中に、実はユニバーサルデザインな授業は織り込まれているのである。それを自覚し、明文化し、全学的な認知とともに広げていくことが求められているといえよう。ユニバーサルデザインの授業は、例えば障害のある学生のみならず、一般の学生にとっても学びやすい授業であるから、学生の満足度は全般的に上がっていくことが期待されるのである。今後の授業方法のデザインにとって、一助となることを願っている。

言語教育におけるユニバーサルデザイン
北星学園大学　共通部門　科目「日本語表現Ⅰ／英語Ⅰ」

北星学園大学では、初年次の言語教育科目においてユニバーサルデザインを意識した授業づくりが複数実践されている。その中でも、吉岡亮先生が担当する「日本語表現Ⅰ」と、沢谷佑輔先生が担当する「英語Ⅰ」の実践を紹介したい。

多様なレベルの受講生に対応する

はじめに、「日本語表現Ⅰ」を紹介する。この科目は、大学受験のために小論文の練習をかなり行ってきた学生から、中学校・高校での作文以外はまともに文章をほとんど書いたことがない学生まで、多様な学生が受講している。それまで学習習慣をほとんど身につけてこなかったという学生も一定数いる。その中で吉岡先生は、①大学で必要な調べる、読む、書く技能について全員が理解できること、②書き方のルールを守り、文章表現の型をある程度理解すれば、最低限の文章表現力は獲得できることの2点を意識して授業づくりをしている。

課題を中心とした授業設計

授業課題というと授業時間外に行うものというイメージがあるが、吉岡先生は課題を授業中に達成してしまうことを目標とした授業設計をしている。具体的には、①前回課題へのフィードバック（20分程度）、②課題の説明（30分程度）、③課題の実施（30分程度）という構成になっている。授業構成が毎回同じであるため、学生も学びやすくなっている。課題は、新聞記事などを400～600文字に要約するものや、特定のテーマについて自分の意見を記す記述問題である。この課題が成績の50％を占めるため、学生も集中して授業に臨む。

②課題の説明では、課題文のテーマに関する解説をする。文章中に登場する用語やキーワードについて、できるだけ具体的かつ簡潔に説明するよう心掛けている。また、単に口頭で伝えるだけでなく、実物や動画などを用いて視覚的な理解も促すようにしている。

③課題の実施とは、要約などを授業中にさせてしまうものである。授業時間内に完成させて提出することが目標だが、学生によっては授業時間だけでは足りないこともよくある。その場合は、授業時間外に取り組み、翌週の授業前までに直接提出させている。こうすることで、ライティングスキルが高い学生は授業時間内で集中して学ぶことができ、低い学生も授業内で不明点を解消しつつ、授業外時間を生かして課題を達成することができる。

そして、提出された課題については、できるだけコメントを入れるようにしている。ただ、コメントも一言一句丁寧につけることもできないため、記号なども用いている。これらについて①前回課題のフィードバックで全体に向けて解説する。出来が良かった課題についても匿名で共有し、どのような点が良かったかを解説することで、受講生全体の理解を深めるようにしている。この②③①という流れによって、教員と学生の間で双方向性が生まれ、学生のライティングスキルが回を追うごとに高まっていくことを学生自身も実感できるようになる。

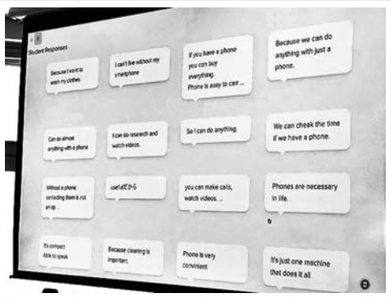
書き込み式プリントを活用

吉岡先生がもう1つ工夫している点が、書き込み式プリント（B4裏表1枚程度）の活用である。これによって、学生は手を動かしながら授業を受講することになり、集中力が高まる。加えて、学びのプロセスとゴールが明確になるため、学習意欲も高まる。さらに、各学生のプリントへの書き込み状況を確認しながら授業を進めることができるため、進度を都度調整することができる。まさに、一石三鳥の工夫である。

以上のような工夫の結果、学生からは「説明が丁寧で、進め方が良かった」「レポートなど苦手だったが、聞きやすい環境でわからないことも優しく教えてくれてとても分かりやすい授業だった」といった声もあがり、授業アンケート総合評価は満点、単位習得率も95・5％という十分な成果を生み出している。

様々なICTツールを有効活用

吉岡先生は、アナログな方法をあえて積極的に取り入れることでユニバーサルデザインを実現している一方、「英語Ⅰ」を担当する沢谷先生はICTツールも積極的に活用している。たとえば、授業中にスマートフォンを活用して早押しクイズができるノルウェー発のWebサービス「Kahoot!」や、授業進度に合わせて学生の声を集めることができる「Pear Deck」を使用している。これらのツールは挙手する必要がなく、匿名性も担保されるため、自らの考えを表現しやすいというメリットがある。結果的に、教員と受講生全員との双方向性を担保すると同時に、英語に対する苦手意識を持った学生の英語学習のハードルを下げ、楽しく学べるようになる。



「Pear Deck」で学生の意見を全体共有

板書中心で学生の進度に合わせた授業展開をする吉岡先生

基本に忠実な授業実践

沢谷先生の授業は、ICTツールを活用しつつも、授業づくりやユニバーサルデザインの基本に忠実な実践となっている。第1に、目的や目標を常に意識することである。たとえば、先のICTツールも、使えばよいというものではない。活動の目的や学生に身につけてほしいスキルを考慮して最適なツールを選ぶように心がけている。また、課題や指示を出す際にも、何を目指しているのか、なぜ取り組む必要があるのか、どのような点を評価するのかを必ず学生に丁寧に説明するようにしている。

第2に、受講ルールを最初に明示し、定期的に確認することである。たとえば、欠席や遅刻をする場合は、必ず連絡するこというルールがある。これは学生に対してだけでなく、教員自身も徹底する。たとえば、会議などで少しでも授業に遅れる場合は、その旨をLMSを通じて受講生に事前に連絡する。教員も約束を守ることによって受講生との信頼関係ができ、遅刻や欠席した学生とのコミュニケーションがフォローアップにもつながる。

第3に、学生が学び方を選べるようにすることである。たとえば、ノート作成法も学生によってさまざまである。教員は筆記時間に学生間の差が生じにくくなるよう、メモが可能なハンドアウトを印刷配布している。学生は、それを活用して自作ノートを作る者もいれば、自身のPC等でノートテイキングする者もいる。さらに、調べ学習など、演習への取り組み方も学生に委ねている。一人、ペア、グループなど、自分の好きな方法で学んで良いことになっており、教室内で様々な学び方がみられる。彼らの学び方を尊重することで、心理的に安心し、かつ自分に合った方法で授業に参加できるようになる。

こうした取り組みの結果、「英語Ⅰ」においても授業満足度は5・0となり、ほとんど全員が単位修得に至り、学内のモデルティーチング顕彰の受賞対象科目にも選ばれている。

まとめ

両先生の実践に共通している点は、あらゆる学生が取り残しなく学びを継続し、学修目標を達成することを目指して、授業設計および実践上の工夫をしているという点である。

その結果、能力や意欲の高低に関わらず、全ての学生にとって満足度が高く、かつ学修成果をあげられる授業実践となっている。

（京都橘大学　西野毅朗）

学生の苦手を考慮した授業づくり
高崎健康福祉大学　人間発達学部　科目「病弱児の指導」

はじめに

高崎健康福祉大学人間発達学部の専門講義科目である「病弱児の指導」は、同学部3年次生以降を対象とした選択必修科目であり、50人程度の学生が履修している。

もとより、多様な児童の支援や教育について学ぶ科目ではあるが、この科目を担当する村田美和先生は、受講生の苦手意識を丁寧に汲み取り、各学生が学びやすくなるように様々な工夫をしている。

今回紹介する工夫は、様々な科目で応用可能なものであり、BYODが進む大学において実践可能な新しい授業のあり方として紹介したい。

ユニバーサルデザインにかける教員の思い

村田先生は、授業を通じて知識を教授することだけを目指しているわけではない。自分の考えを人に伝え、人の意見を聴くことで様々な考え方があることを知り、教育上の課題について考え続ける力を身につけてもらいたいと考えている。

そして、大学での学びを楽しみ、自分なりの学び方を身につけてもらいたいと考えている。受講生は、教育に対する興味・関心や学習意欲を持っているものの、静かで控えめであり、人前で発言することが苦手という学生が多い。そこで、ICTを活用して多様な学び方を提案し可能にすることで、学びに対する様々な苦手意識を引き下げる。

そして、自分なりの学び方を見つけていくことを通じて学修目標を達成し、さらには大学での学びだけでなく生涯学習につなげてもらえればとの思いを込めて授業を実践している。

教室に出てくることが苦手な学生

学ぶために第1に必要なことは、学びの場に参加することである。しかし、昨今は対人恐怖等を含め、何らかの理由により教室に出てくることができず、合理的配慮が必要と判断される学生がいる。また、諸事情により特定回だけ教室での参加が難しいという学生もいる。そこで、村田先生は対面授業をZoomでも同時配信するハイフレックス型授業を実施している。安易に遠隔授業を選ばないように、遠隔授業を受けられる上限回数や受講ルールを定めるなどの工夫もしている。その結果、授業参加が継続しやすくなり、教室にも戻りやすくなり、学生の全体的な出席率を高めることに成功した。

ノートをとることが苦手な学生

講義を理解する上で必要になる基本的な力は、ノートを取る力である。しかし、最近はノートを取る習慣が身についておらず、手書きでノートを取ることに苦手意識を持っている学生もいる。そこで、ノートは紙でもデジタルでも、自分に合った方法で取るように指導している。その中で、手書きが苦手な学生もいることを考え、マイクロソフト社のOneNoteやキーワードをマップにしてノートにすることができる無料ソフトを紹介するなど、手書き以外の様々な方法を学生に提案している。そして、実際のノート整理法だけでなく、授業の内容を自分が見返しやすい形で書き留めること、そのための手段は手書きでもデジタルでも自分の得意な方法で取り組むことが重要であると受講生に説明している。

ロイロノートで実際に集められた学生の意見

資料を読むことが苦手な学生

講義の予復習や自主学習で重要になるのが、資料を読む力である。昨今の大学生は活字を読むことになれていないため、予復習や自主学習のための学習材を提示しても、なかなかそれに取り組むことができない。そこで、学生に推奨しているのが、文字の読み上げ機能である。これはiPad※1に初期設定されている機能であり、PDFファイルなどの文字を自動で音読してくれるものである。受講生は車で通学している者も多いため、通学時間中にこの機能を活用して講義の予復習や自主学習としているという。したがって、逆説的ではあるものの、提供する学習材は出来るだけ活字になっているものを選ぶようにしている。

発言することが苦手な学生

大人数の授業の中で挙手して発言できる学生は限られる。そこで村田先生はいきなり発言者を指名するのではなく、まずは近くに座っている学生同士2、3人で考えてもらうようにする。学生が話している間、教員は机間巡視し、各グループに対して声掛けを行う。学生―学生間だけでなく学生―教員間でもコミュニケーションをとることで、話やすい雰囲気が作られる。そして、各学生グループを回りながら発言してくれる学生を募集し、自主的な発言につなげる。友人や教員に認められたアイデアは特に発言しやすく、全体に向けて発言するハードルが下がるのである。

しかし、この方法では一部の学生のアイデアしか全体共有することができない。そこで、村田先生は授業支援ツール「ロイロノート」※2も活用することがある。このツールは、一人一人の意見を、授業中に素早く集約し、受講生に共有できるものである。教員はその中から気になった記述をピックアップしてフィードバックし、次のディスカッションにつなげることができる。学生も自身の周囲の学生の意見だけでなく、教室全体の様々な考え方を知ることができるため、授業の目標達成にも役立つ。

ディスカッションが苦手な学生

少人数とはいえ、学生同士のディスカッションが苦手な学生もいる。周囲にディスカッションできる学生がおらず、結局1人で考えているという受講生もいる。座席指定はしていないため、周囲の学生とのディスカッションという形式は、価値観が近しい仲の良い友達とのコミュニケーションで終わってしまう危険性もある。話すことが苦手でも、書くことならできるという学生もいる。

そこで時々実践しているのが、Googleドキュメントの共同編集機能を使った、書き込み式ディスカッションである。事前に教員が学生をグループ分けしておく。授業中に教員はディスカッションのお題を出し、それについて、学生は割り振られたグループの共同編集欄に書き込んでいく。この方法であれば、どこの座席に座っていても、1つのグループとしてディスカッションすることが可能になる。また、他のグループの記述も見えるため、何をどのように書き込めばよいかがわかりやすく、様々な考え方を知ることもできるのである。

まとめ

このような取り組みの結果、参加度20％、課題（リアクションペーパー）20％、期末試験60％という成績評価方法を用いている中で、全受講生が単位取得に至っている。また、授業アンケートの満足度も5点満点中4・71点（回答率95％）と非常に高くなっている。

学生の様々な苦手意識に寄り添いつつも、授業の到達目標を意識した様々な工夫を取り入れることによって、高い学修成果と満足度を両立させることにつなげている素晴らしい事例といえるのではないだろうか。

（京都橘大学　西野毅朗）

※1　人間発達学部では、昨年度までiPadを学部生全員に大学による半額補助で購入してもらっている。今年度よりレンタル利用している。

※2　人間発達学部でロイロノートを契約しており、教員と学生が自由に使うことができる。

茶道文化で実現するユニバーサルデザイン
長崎国際大学　全学共通科目「茶道文化ⅠA」

長崎国際大学の嶋内麻佐子先生と柳井駿平先生が担当される全学共通科目「茶道文化ⅠA」では、ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりが行われている。この授業は、対面形式の初年次必修科目であり、2015（平成27）年度から全学共通科目として実施されている。1年次生4 35人（2024年度）全員が履修しており、さまざまな背景を持つ学生を受け入れている。近年では、個別の配慮を必要とする学生が増えており、それに対応するための多様な工夫が取り入れられている。本稿では、ユニバーサルデザインに基づく授業「茶道文化ⅠA」の取組みとその工夫を紹介する。

少人数グループによる授業運営

授業は7～8人程度の少人数グループに分かれて進行し、各グループには1人の担当者が配置されている。この担当者には、教員だけでなく、茶道専門家（非常勤講師）、事務局職員、さらには研修と審査を経た補助員の学生（以下、「補助員学生」という）も含まれる。補助員学生への研修は、春季と夏季の年2回それぞれ6日間の日程で実施される。

授業開始前には、担当者全員が資料を用いて到達目標や連絡事項を確認し、担当の分担を明確化するための打ち合わせを徹底して実施している。授業中に気づいた学生の様子や問題点は全員で共有され、担当者やグループの編成を柔軟に変更するなどして、次回の授業に迅速に反映している。

少人数教育だからこそ、学生一人ひとりに合わせた最適なサポートを実現している。たとえば、授業中の学生の様子を身近に感じられることから、元気がない、あるいは普段と違うと感じた場合は、他の教員や補助員学生と確認や相談を行う。さらに、必要であると判断した場合は、キャンパスライフ・ヘルプサポートセンター（以下、「CHサポートセンター」という。）に連絡を取ることもある。

授業アンケートの満足度は高く、「担当者が一人ひとりに丁寧に親切に教えてくれた」「質問がしやすい環境だった」という意見も寄せられている。

多様な学生に対応したユニバーサルデザインの授業設計

この授業のほとんどの受講生が茶道をはじめて学ぶ。そのため、最初の授業では、補助員学生によるお点前の披露がある。受講生たちは、その立ち居振る舞いを見ながら、この授業を受講する自分たちの到達点を理解することになる。

受講生の中には、留学生や身体的制約のある学生など多様な背景を持つ学生がおり、このような学生が授業に参加しやすいように、さまざまな工夫が行われている。たとえば、正座が難しい学生には、体に負担がかからない姿勢を許可すること、車いすの学生には茶室に入るためのリフトを設置するなどの対応を行っている。

留学生に対しても、状況に合わせて日本文化を段階的に学べるサポートを提供している。以前は中国からの留学生が多く、漢字文化が共通しているため、コミュニケーションや授業の進行にそれほど大きな問題はなかった。しかし現在は、東南アジアなどからの留学生が増え、靴を脱ぐ所作や正座といった日本独特の基本的な文化や習慣を理解する必要がある。それが結果として、留学生が授業を楽しむことにつながっている。また、以前は日本人学生と留学生が別々の部屋で授業を受けていたが、現在では同じ場所で授業を受けるようになり、互いに刺激を受けながら成長している様子が見られる。

全学的な支援体制と連携による合理的配慮の実現

このように茶道文化の授業では、学生一人ひとりに寄り添ったさまざまな配慮・工夫が行われているが、その基盤として重要な役割を果たしているのが、全学的な支援体制である。

これは、個別の授業や教員の努力を土台に育まれてきたものである。茶道文化の授業でも、合理的配慮が必要な学生への対応について担当教員が全学的な会議に出席して具体的な状況や課題を共有し、学生の支援方法や解決策を模索してきたという。こうした背景から形成されてきた全学的支援体制によって、現在の少人数教育や多様な学生に対応・配慮する授業設計の実践が支えられているのである。

茶道文化を受講する留学生への対応についてみてみても、国際観光学科の日本語教員や国際交流・留学生支援センターと連携しながら、必要なサポートを提供している。授業外での集合場所の連絡といった細かい点についても、フィールドワークにおける支援が行き届く体制が整備されている。

また、同大学では、全学的な支援体制の基盤として、CHサポートセンターやピア・サポーターの学生が重要な役割を果たしている。

CHサポートセンターでは、配慮が必要な学生に関する情報をデータ化し、教員がその情報を基に迅速かつ適切な対応を取るためのサポートを行っている。具体的には、CHサポートセンター発行の『学生サポートブック』に症状や行動の背景、またその対応やサポートのヒントが記されており、教員は学生に対して、個々の状況に応じた柔軟な支援をすることができている。

他方ピア・サポーターは配慮が必要な学生に寄り添い、必要な時に支援を提供する役割を担っている。茶道文化の授業は、演習科目で、学生自身が道具を扱い、作法を学んでいる。その場面において、たとえば、車いすの学生にはピア・サポーターが付き添い、茶室内の移動や演習中の必要なサポートを提供している。このような取り組みは、CHサポートセンターやピア・サポーターとの効果的連携を示すものである。

さらに同大学では、修学上の配慮が必要な学生に関する教職員対象の研修が、年度初めに必ず実施されている。この研修では、配慮が必要な学生に関するデータの確認やそのデータを活用した授業運営についても取り上げられている。研修後には、データが実際に確認されたかどうかの確認も行われているため、教職員全員が支援体制を理解できる仕組みになっている。

授業担当者がCHサポートセンターや他の教職員と連携し、一人ひとりの学生のニーズに対応した配慮や工夫を実現する中で生まれた知見は、他の授業や支援プログラムにも応用されている。このように、個別の授業から得られた経験的積み重ねが、全学的な支援体制の構築へと発展してきたことが、現在の包括的な支援体制を支えているといえる。

まとめ

このように、長崎国際大学では、全学的な支援体制を基礎に、茶道文化の授業を通じて、配慮申請した学生だけでなく、留学生も含めたすべての学生に対するユニバーサルデザインを実現する教育モデルを構築している。学生たちはこの授業を介して自分と異なる背景や特性を持つ仲間と共に学び合う経験を積む。それは、多様性を尊重し共生する視点を育むだけでなく、社会で活躍するための実践的な力を養う場にもなっている。この教育モデルは、学生自身の成長を支える教育の一環として、十二分な役割を果たしているのである。

重ねていえることは、茶道文化の授業における個別支援の経験や課題解決のプロセスは、大学全体の教育環境の改善に寄与し、それがまた個別の授業運営・実践にフィードバックされ、新たな知見となって集積され豊かさを増しているということである。こうしたサスティナブルな取り組みは、他大学への導入モデルとしての可能性を広げている。

（愛媛大学　清水栄子）

点前確認（実技テスト）立礼での様子